

研究主題

思考力・表現力を高めるための授業実践

1 主題設定の理由

本校舎小学部の児童は、聴覚障がいのある児童や生活体験の不足により言語獲得に困難を生じる児童が在籍している。児童の表現方法は、音声のみならず、手話や指文字、ジェスチャー、文字、イラスト、VOCA、アプリ(指伝話)等である。教育課程も通常や重複など様々であり、学びの場は個々に応じて行っているが、本研究では、教育活動全般を通して既習事項や経験と関連付けて自分に置き換えて物事を考えたり、感じたことを自分の言葉で発表したりすることを習慣付けていくことに継続して取り組みながら、「語彙を豊かにし(思考)、それを活用して表現する(表現)力」を高めることを目的として本テーマを設定した。

2 推進計画

2年次目の研究推進計画について示す。

今年度は「令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会」の運営を担当したため、その内容も含む。

月 日	研究活動	内 容
4月20日	第1回全校研究会	前年度研究の確認と今年度の進め方について
5月17日	グループ研究会	研究の進め方について検討・確認
7月4日	研究授業 授業研究会	6年B組 国語「わたしたちにできること」
8月21日	グループ研究会	令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会について
9月4日	グループ研究会	令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会について
9月27日	グループ研究会	令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会について
10月6日		令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会(本校開催)
11月16日	全校研究	iPad 事例研究会
11月17日	研究大会参加	令和5年度東北聾教育研究会小学部会研究会(弘前聾学校)
1月15日	グループ研究会	グループ研究のまとめ
1月23日	グループ研究会	グループ研究のまとめ
2月14日	第2回全校研究会	グループ研究の発表、全校研究のまとめ

3 本校舎小学部における、めざす「豊かな学び」の姿

- ① 自分で考えたり、感じたりしたことを音声、手話、指文字、ジェスチャー、文字、絵、アプリ(指伝話)、VOCAなどで表現する。
- ② 「相手に伝えたい」「知りたい」「分かりたい」という気持ちをもつ。
- ③ 「やってみたい」という気持ちを持ち、様々な活動に取り組む。

4 1年次目の研究概要

1年次の研究では、児童一人一人の思考力・表現力に注目した下図のような「目標設定シート」を使用し授業研究を行った。個々の課題や成果を学部職員全体で共有し、より良い指導や支援の方法に

について検討を重ねた。また、様々な学習活動の方法に触れ、新たな課題や児童の成長する過程について話し合い、理解を深めた。

本校舎小学部は、個別学習が多い中、児童が複数で学習ができることは、友達の感想や意見を聞き、考えが広がることになり重要である。また、児童が経験したことや調べたことを伝えたいと思う気持ちに寄り添いながら、友達同士や教師と共有できる瞬間を大事に積み重ね、個々の「考える」を認め合い、様々な「言葉（表現）」に触れるきっかけにしたい。

令和4年度 小学部研究 目標設定シート（4年A組）		R4. 9.12			
1.授業の流れについて		2.重点的に取り組みたい項目について			
題材名（単元名） 総合 プログラミング 「自分で考えて作るう」 ■学習活動（思考力） 自分で工夫を考え、教師と相談しながら作品を作ることができる。 □学習活動（表現力） 作品を発表する。	目標 (身につけさせたい力)	評価		改善案	
		成果	課題		
	●思考力	・作ったルーレットをもとに、どこをアレンジさせたいかを教師と相談して決めて作ることができる。	・教師と相談しながら作ることができた。 ・作りたいものを作品例から選ぶことができた。	・作品を作り上げることよりもタップをすること(操作する)自体を楽しんでるようだった。	・くんでどんな作品にしたいか絵を描いてみる時間を取ればよかったのではと思う。
	○表現力	・考えたことを作品にして表現することができる。 ・工夫したこと(頑張ったこと)を手話や指文字で表現することができる。	・教師の支援であきらめないうで最後まで作ることができた。 ・緊張した表情だったが、感想を手話で発表することができた。	・教師の支援なしで一つ一つの手順を踏まえて作るのが難しい。 ・くんの感想が言えるような気持ちの引き出しの工夫が必要である。	・教師の支援なしで一人で正確に最後まで作するためには、一つ一つの手順をしっかりと踏まえて練習の時間が繰り返す必要。 ・気持ちの伝え方で選択肢を考慮する。はい、いいえの答えになる質問だけでなく、「簡単？難しい？」というどっちか？を含めた質問のあるやりとりで気持ちを引き出す。

図1 「目標設定シート」 ●思考力 ○表現力

5 2年次目の研究実践

(1) 研究方針

今年度も昨年に引き続き、「語彙を豊かにし(思考)、それを活用して表現する(表現)力」を高めるための授業づくりについて検討する。既習事項や経験と関連付け、自分に置き換えて物事を考えたり、学習活動を通して感じたことを自分の言葉で発表したりすることを習慣づけていけるよう継続して取り組む。

昨年度の実践を通して明らかとなった児童の実態に合わせ、更なる思考力・表現力を発揮できる環境や支援のあり方について検討し実践を重ねていく。

今年度の小学部の児童は、全員聴覚障がいがあるが、医療的ケアを要する児童や知的障がいを併せもつ児童もいる。情緒面について、自信がなかったり、気が乗らなかったりすると活動に背を向ける児童や、強く気になることがあると、活動に向かうまでに時間を要したりする児童、また、自信がないときや見通しをもちにくい活動のときに情緒が不安定になりやすい児童がいる。安定した気持ちで活動できるように、休憩を長めに取り、見通しを丁寧に伝える等の対応をしている。学習面については、興味、関心のある内容を取り入れながら進めている。「できる」「分かる」と思うことには意欲的に取り組んでいる。

準ずる教育課程で学んでいる児童は、同年齢の友達と関わることが少ないため、友達の考えから学んだり、自分の考えと比べてたりする経験が少なく、考えが深まらないことがある。また、間違いを指摘されると受け入れることができず、黙り込んでしまうなど繊細な一面もある。

このような児童の実態から、安心して学習できる環境であることが、自分で考え、気持ちを表現するために必要だと考える。また、友達同士の関わりも大切にしたい。児童の表現を認め、自信をもち安心して学習できる環境を整え、他者との関わりを意識しながら、児童の実態に合わせた表現力を育てていきたい。

(2) 研究授業

6年B組 国語「私たちにできること」(光村図書) 教育課程：聴覚通常I

(単元の内容) 具体的な事実や考えをもとに、提案する文章を書く。

聴力レベル (dBHL)	聴力レベル (dBHL)		装用時間 閾値 (dBHL)	補聴器・ 人工内耳	児童の実態 単元に関わる実態
	右	左			
R	500Hz	—	—	30dB	右:人工内耳 SONNET2 左:なし 【児童の実態】 ・両耳感音性難聴である。 ・補聴援助システム Roger を使用する とうるさく聞こえるという訴えから、 Roger は使用していない。 ・聴力を活用し、周りの音や相手の話を 聞いている。周りの音や相手の話をよ く聞いているが、助詞や言葉の使い 方や言い間違いがある。 ・音声、手話、指文字等を使ってコミュニ ケーションを取る。 ・たくさんの人に注目されることに苦手 意識をもっている。 ・集団活動への参加が難しい友達に優 しく声を掛け、誘う様子が見られる。 【単元に関わる実態】 ・同年齢の友達と関わる機会が少ない ため、友達の考えから学んだり、自分 の考えと比べたりする経験が少ない。 ・示された資料の中から「ごみ」をテ マに選ぶことができた。また、学校のご みについて調べたり、給食の食べ残し についてインタビューしたりと興味をも って学習する様子が見られる。 ・会話の中で、給食の食べ残しを減らす ためにはどうしたらよいか話題にする と、「毎日カレーにすればみんな残さな いんじゃない？」と話すなど素直に自 分の考えを話す様子も見られる。 ・今までの学習の積み重ねから自信を もち、自分の考えを周りの人に表現す ることが増えてきた。
	1000Hz	—	—	20dB	
	2000Hz	—	—	30dB	

[図2 児童の実態]

時間	学習内容	教師の支援・配慮事項	準備物等
導入 5分 (9:45)	1 あいさつ 2 学習内容の確認	・学習計画を確認し、学習内容の確認ができるようにする。	・学習計画の 紙板書
展開 35分 (9:50)	3 めあての確認 ごみの現状と問題点を確かめ、私たちにできることを考えよう。 4 前時の学習(学校から出るごみ)を振り返る	・前時の学習で使ったプリントを使い、気付いたことの振り返りができるようにする。 ・前時に学習したことについて質問し、内容を思い出し、私たちにできることは何なのかを考えられるようにする。 ・学習プリントや授業で使用する写真は、児童が資料収集の際に撮影したものや、児童が本で調べた内容を使い、児童の学習を元に授業を組み立てる。	・前時の学習 プリント(拡大したもの) ・写真 ・学習プリント ・環境問題に関わる本等の資料 ・iPad
	5 学校からでるごみについて、私たちにできることを考え、書く	・児童の考えや気付きを受け止め、児童が安心して発言できるようにする。 ・教師とやり取りをしながら考える時間と、書く時間を分ける。	
	6 給食の食べ残しについて気付いたことを考え、書く	・4,5の学習活動で時間が必要な場合は、6,7については次回行う等、児童の学習のペースに合わせて。	
	7 給食の食べ残しについて、私たちにできることを考え、書く	・小学部の給食の食べ残しについての写真を提示し、気付いたことはあるか質問する。教師とのやり取りの中で考えを整理できるように丁寧にやり取りをする。	
まとめ 5分 (10:25)	8 私たちにできることを発表する 9 次回の学習について確認する。	・児童の考えを受け止め、称賛し、自分の考えをもつことに自信をもてるようにする。	

[図3 指導案略図]

(3) 授業研究会

授業研究会 7月4日(火) 15:50~16:55 学習室①	
*授業者から ・児童6年生1名。多くの先生方が来ていて緊張していた。年齢もあり、恥ずかしがって発言が少なくなるかと思ったが、頑張って自分で考えて発言していた。終わってからはほっとして「疲れた、楽しかった」と感想を話していた。 ・授業後の5時間目には、研究授業よりも多く自分の意見を話していた。 ・本時の目標は達成できたと思う。 ・6と7に予定していた給食の食べ残しについての学習は後日行う。今回は前時までの振り返りやごみのその後について考える時間を多くとった。	
*グループ協議	
協議の柱 思考力～子供たちに考えさせるための手立てや取り組みについて	・感覚のズレを感じることもある。問題をつかませるにはどうしたらいいのか、何が問題となるのかを考えていきたい。 ・昨年ごみ収集車の見学やごみ集めの見学をした。決まった日に集められていた等のイメージがあったのではないかと。国語的には、文から読み取ることも大切だと思うが、聴覚障がいの子どものため体験的な活動や知っていることから教科の学習に繋がったのではないかと。Rさんとしての「気づく」という段階的な学習に繋がっていると感じた。 (給食について) ・栄養教諭の晶子先生に、給食で残したものがどうなっているのかインタビューした。給食で残したものがどうなっているのか？その後も興味をもって質問する様子が見られた。ごみや給食についてまとめて、再度提案する文章へとつなげたい。

<p>豊かな表現力～相手に伝わる表現力（説明する力等）を育てるために</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・人前に出て、丁寧に話したり説明したりすることが難しい児童。自信がなく、声が小さくなり何をするか伝えられない場面が多く感じる。児童が言いたいことを「こういうことを言いたいんだよね。」と教師が整理して話す手立てが今後も必要だと感じた。 ・日常の会話を思い出して、引き出しながら言葉をつなげている姿があった。 ・教師とやり取りをしている中で考えを整理できることが1対1の学習の良さであり、チャンスとなる。色々な話をして知識を蓄積していくことも大切だと考える。 ・基本的小ごみに対しての知識をどこまで国語で扱うのが難しい。 ・興味をもって取り組むことができている。
<p>環境整備の工夫、環境の構成の工夫</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な校内資源の活用をしていきたい。 ・本人が主導となるように写真を撮りに行ったり、自分で調べたりしたことを授業で扱っていて良かった。 ・国語なら、説明文や物語文の読み方、書き方のパターンを通年で教室に掲示してみてもどうか。他の児童が見てもいいと思うし、自分で掲示の中から必要な情報を選ぶことも学習になる。 ・職員間についてだが、職員室の座席がひとまとまりになったことで、普段の様子を共有しやすくなった。

***助言(鎌田副校長)**

- ・「ごみを減らすために私たちにできること」についていろいろな方法があって焦点化することの難しさがあると思う。「大切に使う」「工夫」等情報を選んで良いのではないか。
- ・子ども達はごみが減ることの実感がないように思う。分別すればごみが減るのか、可燃ごみに混在しているものを見たり体験したりすることも必要かもしれない。
- ・一人での学習の難しさだが、自分が考えたプリントを活用して、中学部のAB組に提案することも良いのではないか。聞かれた側も勉強になると思う。他学部の先輩の活用もとても良いと思う。

下記の提案する文章を書いた。呼びかけのポスターも制作し、学部集会(元気元気集会)で発表した。

給食の食べ残しを減らそう。

6年B組 R

1. 提案のきっかけ

栄養教員の晶子先生にインタビューをした。1日に作る給食の量は、約170人分を作って、量にする約80kgだった。7月3日の給食の食べ残しは、全部で17kgだった。ほくは、二人に残してでもおこらした。でも、少しは、食べてほしいと思った。小学部では、食べ残しがある。量が多か。たり、きらいな物があるからだ。食べ残しの給食は、すべて捨てられる。ほくはもったいないと思った。また食べられるのに捨てられるのは、もったいない。

以上のことから、給食の食べ残しを減らしたいと思った。ほくは、2つのことを提案する。

2. 提案

(1) 元気元気集会で呼びかけをする。

[図4 児童が書いた提案文]

小学部のみんなは、給食の食べ残しが捨てられることを知らないと思った。それを小学部のみんなに伝えたいと思った。そのことを分かってもらえれば小学部のみんなは、みんなは、食べてくれるのではないかと。具体的には、次のような内容をお呼びかける。

○「給食の食べ残しは捨てられている。」

○「給食は、全部食べるか、少し減らそう。」

(2) ポスターを作っている。

給食の食べ残しを減らすためにポスターを作り学習室1にはる。小学部は、学習室1で給食を食べるので目に入るようにするためだ。

具体的には、次のような内容をお呼びかける。

○「食べ残しを減らそう。」

○「きらいな物は、食べるか、減らすかしよう。」

3. まとめ

このように元気元気集会やポスターで給食の食べ残しについて呼びかけをする。そうすることで給食の食べ残しが捨てられていることを知れば小学部のみんなももったいないと感じるのではないかと、そしてみんなは、食べて食べることで給食の食べ残しも減るかと。思っている。

給食では、苦手の物がある。量が多いこともある。でも少し食べたり、減らしたりしてできることから始めていきたいと思います。

(4) 令和5年度東北聾教育研究会幼稚部会研究会

1 テーマ

「主体的に関わり合う力を育むために～個に応じた環境の構成の在り方～」

2 研究協議の内容について

(1) 指導助言者

元 岩手県立盛岡聴覚支援学校校長

石川 敬 氏

いわて幼児教育センター

岩手県教育委員会事務局学校教育室幼児教育担当主任指導主事 瀬谷圭太 氏



(2) 研究協議1

盛岡聴覚支援学校幼稚部5歳児3名の「サーキットをしよう(運動あそび)」の授業のビデオを視聴し、授業研究会を行った。教師の声掛けの際の言葉の選択はどうだったかについて話し合われ、「合わせる」という言葉の手話表現についてや、「動き」「道具」どちらを合わせるのか等意見が交わされた。

(3) 研究協議2

各校から提出していただいたレポートを基に発表と協議を行った。各校の取り組みの様子を知る機会となった。

3 成果について(指導助言)

- ・サーキットは、競わせるのではなくて、選んだり考えたりするのが良かった。できないではなく、一緒に楽しめる学びがあった。ワニになるなどイメージを膨らませる場面がとても大事。いろんな実態の子どもが楽しめる内容だった。
- ・教師も環境の1つ。これからも一緒に楽しむ遊び心をもってほしい。
- ・環境構成は何度でも再構成できる。様々な目的のために環境構成をしていることが分かった。伝えたい思いが子どもから出てくるまでじっくり遊ぶ時間の確保をしてほしい。教師の思いはあるが主体は子どもということをお忘れしないでほしい。

4 課題

- ・本校は、聴覚障がい、病弱・肢体不自由、知的障がい教育に対応している。聴覚障がいの幼児児童生徒は、今年度は幼稚部在籍0名、小学部4名、中学部3名と少ない中で学習を行っている。幼稚部の在籍がないため、授業提案は盛岡聴覚支援学校幼稚部に協力をいただき、ビデオ提案という形で行った。アンケートでは、実際の授業を見てみたかったという意見もあり、今後の運営方法の工夫が必要である。
- ・レポートの内容を深めるための時間が足りなかった。発表方法の工夫が必要である。

5 その他

参加者数 27 名

(他校参加者 11 名、担当校参加者 10 名、指導助言者2名、手話通訳者3名)

6 実践のまとめ

(1) 成果（本校舎小学部における、めざす「豊かな学び」の姿に合わせて）

- 準ずる教科の授業で間違いがあった際はさり気なく伝えることで、自信を失わず学習を続けることができた。③
- 準ずる教科の授業では、児童が考えるヒントになる掲示をしたり、学習したことを振り返り思考を整理したりすることで、自分の考えを話したり文章で書いたりすることができた。①
- 学習した内容を他の教師に自分から伝える様子があった。①②
- 集団での活動で発表する際、児童が自分から話すまで待ったり、周りの職員が声を掛けすぎたりしないことで、児童が自分のタイミングで発表することができた。①②
- 児童が自分の気持ちを表現した時は称賛することで、自信をもって表現できるようになった。①②
- 拍手や大きな声、注目されること、勝つことが苦手な児童に対しては、気持ちに寄り添い、児童が表現するまで待つことで、自分の気持ちを表現することができた。①②

(2) 課題（本校舎小学部における、めざす「豊かな学び」の姿に合わせて）

- 準ずる教科の学習をしている児童は個別学習のため、同じ学習をしている他の児童の考えを聞く機会が少ない。教師と二人のやり取りになるため、考えが深まらないことがある。①
- 準ずる教科の学習をしている児童は話し方の手本を見る機会が少なく、他の児童にも伝わる表現で話そうとするため、簡単な表現で話すことが多くなり、表現が広がらないことがある。①
- 児童が手話や音声で表現した際に、教師が手話を読み取れなかったり、音声を聞き取れなかったりすることがある。「もう1回お願い。」と言って、児童が表現してくれても、再度こちらが読み取れなかったり、聞き取れなかったりすると、伝えることをあきらめてしまうことがある。分からなかった時は、「もう1回お願い」と言ったり言われたりするの当たり前だということ、伝わらないときは他の方法で表現してみることを、伝わりやすい手話表現を身に付けていくことを今後も伝えていきたい。①②
- 児童の語彙を豊かにするために、動きや手話、意味と結び付けて伝えることを丁寧に行っている。思考とは、語彙を豊かにすることに限らず、自分の知っている言葉や経験をもとに考えることも含まれるのではないか。①

(3) 終わりに

小学部の職員で普段行っている「児童を待つこと」「児童を褒めること」「児童の考えを認めること」で児童が気持ちの準備をし、安心して発表できる環境をつくることができたと感じる。その積み重ねが児童たちの自信を育み、主体的な活動や表現に結びついたと思う。今後も自分の知っている言葉、経験から考える(思考力)ための支援を模索していきたい。

今年度、東北聾教育研究会幼稚部会研究会の運営を担当し、幼児期の人との関わり、環境設定が大切であることを再確認できた。多くの聴覚障がい幼児児童が地域の幼稚園、保育園、小学校で学ぶようになったが、聴覚障がいの幼児児童生徒を教育する学校として、児童の実態に合った教育を行ってきたい。